



r' >' / i i \!\_\_\ . \ . \ /i  
`ツ' / ,! \_ ,i! Ⅷ ,!--!、Ⅷ \ . i\_7  
0 <.ノ !!\_\_ ,!」 ' \\_\_ `|\_Ⅷ/ |  
 ㄥ, !^i i =// =!! ' , 0  
o. ` / .!// \_\_ // u| ' , \ .  
 / // ! >\_> u ,Ⅷ ' , .  
 / /Ⅷ> , , u ,..イ、' , i i  
, ' / / | , ,イ、' rイ\_ン' \ . ' , . /  
.i / ,.イ Y/ ' r' \ ^\_ンi iⅧ! . , ' /  
>Y<二] i \ , iΔ Y \_!//  
/i |i|! !|i|!.. /i \\_ . \ / }\_>Y<\_\_]  
/\ , i|!|i|!|!|! , , i7 ` \\_ ` , \\_ i /|

「あんなの、私に掛かればへでもないよ。」

そう言って諏訪小僧は早苗に歩み寄る。

「そんな事より早苗ちゃん、あんたは自首しなくても良いの。」

「そ、それはどういう事ですか？」

諏訪小僧に言われて戸惑う早苗。

「私が捕まった理由は聞いているよね。」

「え、ええ、ごそんじですよ、確か自分の楽屋以外の全ての楽屋に隠しカメラを仕掛けて盗撮したとか...。」

「...実はそれ、ちょっと違うんだよ。」

「え？」

「...仕掛けたのは全部の楽屋、勿論、私の楽屋にも仕掛けてあったんだよ。  
...ま、捕まる直前にカメラは回収したけどね。」

「！」

それを聞いた途端、早苗の表情が豹変する。  
諏訪小僧は懐から一枚のCDを取り出した。

「いやぁ～凄い光景だったよ、あんな小さなトランクケースをさなえが空けた途端、  
凄い数の崖下紳士がケースから出て来たところは！」

「.....！」

「そういえば最初の事故のときも私やかなこが真っ先にたこルカの所に駆けつけたのに、  
さなえは遅れてきたよね、あれって、ミラーボール事故に巻き込まれないように、  
意図的にたこルカから離れていたとか...。」

「.....。」

さなえは諏訪小僧の推理を聞くなり黙り込む。  
「あれあれ？黙り込んでどうしちゃったのさ。」  
諏訪小僧はそう言ってさなえに近寄る。

バツ！

さなえは諏訪小僧に対して何かを押し付けようとした！  
「おっと！」  
とっさに諏訪小僧は身を翻す。

「...そんなものを取り出すとはやっぱり犯人はあんただったんだね。」

.....  
.. -< . \ 70、 \ .  
, '7 ( ) ; ; ; ) '、  
ノ ! ; ! i' . i  
; ' ' ; \_ ! ! / ! \_ , i , i  
, ' ' ; > \ | \_ / \_ ヲ , .イ |  
i , ' ! rr=-, ::::: r = ; 7 . ! / , ' !  
!\_Ⅷ! ,Ⅷ" " !コ i  
y-r' ! = ' r' '二、 \ ,



嫌な予感を覚えたさなえは諏訪小僧に恐る恐る問いかけた。

「あ、あの～つかぬ事をお尋ねしますが…画像の切り替えはいつごろ行われたのですか？」

「スタジオの様子を見る限りじゃあ二、三分前に切り替えたみたいだねえ。」

二、三分前。

丁度、さなえがスタンガンを片手にペラペラ喋り始めたころだろうか？

「ディレクター、また電話です！」

「ああもう！今は苦情の電話を受け付けているときじゃあないんだぜ！」

「ち、違います！なんだか知らないけど、「モリヤステッパーズのさなえが罪の告白をしている」と！」

「え！？」

スタジオの方から、そんな会話が聞こえてくる。

それを聞いたさなえは顔色を真っ青にして、その場に崩れ落ちた。

「…たこルカが…あいつがいけないのよ！

同期の私を差し置いて一足先にアイドルとしてデビューしたあいつが！

あんな奴なんかより、私の方がよっぽどアイドルの素質があるはずなのに!!!」

さなえの独白を、諏訪小僧はただ聞いている。

駆けつけてきたスタッフと共に、この事件も決着を付けるのであった。

～ ～

なんやかんやでテレビ局前。

「…結局、諏訪小僧には逃げられてしまいましたねえ、警部。」

こゝが不機嫌なパチュリー警部にそう話しかける。

「五月蠅い！あんたは早い所さなえと崖下紳士ををパトスイーで連行しなさい！」

帰ってきたパチュリーの言葉は予想通りというかなんと言うか。

とにかくこゝは「ハイハイ、解りましたよ。」と、さなえと崖下紳士を連れてパトスイーに乗り込んだ。

大量の崖下紳士を無理矢理一台のパトスイーに乗せた所為かご飯の大盛りのような凄いことになっている。

パトスイーから零れ落ちそうでなんともハラハラさせる光景だ。

「いつかあいつは絶対にこの手で捕まえてやるわ…と、次はアンタの番よ。」

そう言ってパチュリーはいかす丸の方へと振り向いた。

「わかっています。」

いかす丸は特に抵抗もしないで立ち上がる。

「ちょっと待った。」

と、そんないかす丸に話しかけてくるゆっくりが。

いかす丸が振り向くと、そこにはてゐの姿があった。

てゐだけじゃ無い、れみりややらんとちえん夫妻の姿もある。

「どうしたんですか、そろいもそろって。」

そう言ってきたいかす丸にらんはこう問いかけてくる。

「あんた、結局娘には会わないでんこ？」

そう問いかけられて、いかす丸は黄昏気味の表情で。

「…今の私は娘に会う資格も無いって、散々妻にどやされた所です。」

「でも、せめて一言声をかけるくらい...。」

「...娘に会うのは罪を償ってからにしたいと思っています。」

「ええ~!? それじゃあ私は何のために人質にとられたかわからないよ~!」

いかす丸の言葉にちえんが不満をもらす。

「あなたはりぐるきゅんを生で拝めたのだからそれでいいでしょう、  
...それでは、私はもう行こうと思います。」

いかす丸はそれだけ言うと、パトスィーに乗り込んだ。  
そして、パトスィーが動き出そうとしているその時だった。

「待って!」

突然、そんな掛け声が聞こえてきた。

「今の声って...。」

てゐ達は声のした方へと振り向いた。

```

      , ' : : : : : \、
     /  : : : : : \、
    / : : : / : : : 1 : : : . ||、
   // : : // : : / : : : : || |ト、
  V : : / 1 : : /  | : : : : ||  || :|
   : : / \ /      | : : / , ' \、
  人 /  _  |ノ : :      | : : \、
 / . : \ \ ノ      | :      / : \、
 1 : : : , > \ _ , < | / \ > -イ < \ : : |
 > ' : : : , : :) / : : _ ノ : : / : \ ノ ノ
 (: . . : < > ) 二 / : : : : : _ 厂
 \ < > ' : : : : ( : : : ( : : : 二 _ '
 / , - _ , : : 二 -へ : : \
レ'
```

そこにはテレビ局の入り口から走ってくるたこルカの姿があった。

「たこルカ...!？」

いかす丸はたこルカの姿を見て驚きの表情をあげる。  
たこルカはいかす丸から少しはなれたところで立ち止まる。  
そこでてゐ達は気がついた。  
たこルカの足に、何かが握られていることに。

「あ、あれって...。」

てゐはその花を見て気がつく。  
その花は、いかす丸が娘に渡そうとした、公園の花壇の花だという事に。  
呆然とたこルカをじっと見つめるてゐ達。  
次の瞬間、たこルカは信じられない行動にでた。

「おりゃあああああああああ!」

ベッチーン!

...たこルカはおよそアイドルとは思えない叫び声を揚げていかす丸にその花を叩きつけたのだ。  
花はいかす丸の顔にへばりつく。

「.....。」

いかす丸は無言でその花を手を取った。  
そんないかす丸に向かってたこルカは大声で叫ぶ。

「お父さんの嘘つき! 私がアイドルになったら一杯の花束を持っていくっていっておきながら  
持ってきたのはそんな泥臭い花じゃ無いですか!



